

序文

言語は自分の思想や感情を他人に伝える手段として用いられるものである。およそ人間として、自分の思想や感情を表わす必要があるので、別々に自分の言葉を持つているわけである。従つて言葉の表現や言葉と言葉の相互關係や、他種の言語と使用上の相違などもそれによつて發生した。また、語の表現の中で重要な役割をはたす修飾語というものもここで登場する。

だが、一口に修飾語と言つても、その範圍は大變広くて、深い、ここではひんばんに使われる「形容詞」という品詞を取り上げ、考察したいと思う。

まず第一章は「日本語における品詞の概観」である。「形容詞」は品詞の一つであるということとは分かるが、そもそも品詞

はどんなものであるか、こういう文構成上の基本的なものが分からなければならぬと思う。日本の文法界は品詞についていくつかの派に分かれていて、もろもろの説がある。(例えば、時枝文法、山田文法、松下文法、橋本文法など)私は種類の説の中の主なものを一心まとめて、具体的、そして、分かりやすく説明してみたいと思う。

第二章では「形容詞」について以下の四つの観点から考えてみたい。

(一)形容詞の定義について。形容詞は一般的な定義のほかにも、それが何を修飾するかによつて更に分類される。これは形容詞の修飾の機能を明確にする上において、意義ぶかいことだと思ふ。

(二)今日の「形容詞」というものはそもそもどのような形をとっているか、時代によつて、その變遷はどうなるかということを「なりたち」として考察して述べる。

三

(三)形容詞を別の品詞と區別するために、その外形と機能の特殊性を認めることは大切だと思ふが、ここでは基本的な特殊性を挙げて、形容詞の性質を分析したい。

(四)中国語の形容詞との比較——周知の通り地理的な要因によつて、日本は従来中国と切つても切れない関係にある。兩國は文化や言語において互いに影響したりされたりしていることは言うまでもないであろう。だから、そういう密接な關係に基づく中日兩國の言語表現——修飾關係において「形容詞」の相似と相違点もよく見出されるのである。例えば、「品詞の轉成」という特殊な作用は中国語においても、日本語においても等しく見られる。また、修飾する場合における語の使い方の相違については、第二章において詳しく述べたい。

最後に、前に述べた諸問題をまとめて、形容詞についての未解決なところと未來の言葉の展望ということを結論として挙げてみた。

※日本語にも中国語のように口語と文語の區別がある。口語とはもっぱら日常の談話に用いられる言語を言う。本論文の日本語の例は口語を主とした。